

創意と活力に満ちた特色ある学校経営

～ 生きる力を育む創意ある教育活動の推進 ～

I はじめに

グローバル化や知識基盤社会化が進む中、日本の社会は、少子高齢化、経済環境の悪化、人間関係の希薄化等、多くの課題に直面している。この厳しい時代を生きぬくためには、一人ひとりが生涯にわたって学び続け、絶えず知を更新するとともに、自立・協働・創造の力を養い、その成果を社会に生かしていくことが求められている。

また、学校教育においては、それらをしっかりと踏まえ、学習指導要領の主旨を生かし、「生きる力」を育む創意ある教育活動を展開し、教育の質的改善に取り組んでいかなければならない。そして、学校はそれぞれの実態や特性に応じた特色ある教育活動を推進し、児童・生徒の確かな成長を通して成果を示していくことが求められている。

そこで昨年度、本研究会では、各学校の「生きる力を育む創意ある教育活動」「生きる力を育む特色ある教育活動」に視点をあて、実践発表を通して情報交換を行い、相互の実践に多くのことを学んできた。また、教育諸活動の推進役である校長の役割を再確認するとともに、いかにリーダーシップを発揮していくかを探ってきた。

これら昨年度の成果の上に、今年度は、校長の果たすべき役割や各校の特色ある活動を明確にし、それを保護者や地域に理解してもらいアピールできる「学校グランドデザイン」はどうあるべきかを研究してきた。

II 研究の概要

本研究は2年計画の2年次であり、昨年度の研究会で確認したとおり、特色ある教育活動を明確にする「学校グランドデザイン」づくりを推進していくこととした。

いつの頃からか「学校グランドデザイン」という言葉が使われるとともに、年度当初に学校長から提示されるようになってきた。しかし、雑駁な捉え方をしていたり、そもそも学校グランドデザイン自体を作成していなかったりする学校もある。作成が義務づけられているわけではないので当然といえば当然である。

そこで、「学校グランドデザイン」とは本来どのようなものであるかというところから入り、次のような共通認識を持つことから研究を始めた。

すなわち、学校グランドデザイン（学校経営構想）とは、その年度の各学校における教育が目指す姿を端的に示したもので、全職員の思いを集約して作成するものであるとした。また、学校の教育課程等の拠り所であるとともに、学校運営全般の根底をなすものであり、さらに、保護者・地域住民にとっては、学校への連携・協力の方向性を示す基ともなるものであると捉えた。

その掲載内容としては、次のようなものを基本とした。

- ・教育目標 ⇒ 中・長期的な目で見た、育てたい児童の姿
- ・単年度ごとの重点事項 ⇒ 教育目標の達成のため、どこに（何に）重点を置くか
- ・教育活動等の課題 ⇒ 児童・地域の実態から、重点的に取り組む課題
- ・めざす児童と教職員の姿 ⇒ 課題に対して、めざす具体的な児童と教職員の姿

各校から特色ある学校グランドデザインが提示された。その中で、前述のとおり、学校グランドデザインは必須のものではないので設定されていない学校もあり、それらの学校は新規作成となることから、発表の順番を研究日程の終盤に設定した。その作成過程で、本研究会での提案を参考にしたグランドデザインを作成した。

また、小学校統合による平成28年4月開校予定の新設校（笛川小学校）については、統合前の旧小学校四校の校長で原案を作成するとともに、その原案については、統合準備会、コミュニティースクール推進委員会などの場で提示しさまざまなご意見をいただいた。最終的には、新設校の初代校長をはじめとした教職員で検討確認した上で、決定をみることとなる。

Ⅲ まとめと今後の課題

昨年度は、「生きる力を育む特色ある教育活動」がさらに充実したものになるように、各校の実践に学んだり、情報交換を深めたりしてきた。本年度は、その延長線上として、各校の「学校グランドデザイン」を通じて意見交換をする中で研究を深めてきた。

各校とも、一目で全体を見渡せるようにということから、一枚の用紙に記載されているが、多くのことを盛り込みたいという意識からか、小さな字でぎっしり記載されていることが多かった。このあたりの塩梅が難しく、今後の課題となっている。

来年度に向けて、既存のデザインのある学校は必要に応じて変更を加え、設定されていなかった学校（来年度統合校を含む）については、本研究会に素案を提案し、様々な意見をもらう中で、来年度への参考とする場ともなった。

年度初めの議題山積する職員会議の中で、グランドデザインを校長が提案するが、通り一遍の説明で終わってしまうことがある。そのような中で、今回新規に作成した学校で、新規であるが故に、教職員に提起して複数回検討を加え、来年度へ向けてのグランドデザインを作成した学校があった。研究の概要にも記したとおり「全職員の思いを集約して作成する」ことを実践していた。なかなか難しいことである。たとえきれいな形にまとまっていなかったとしても、作成過程に全職員が関わったという事実こそが貴重なのではないかと考える。時間のない中でも、学校教育活動の根幹に関わる部分を大切にしていきたい。

さて、見方によっては校長は孤独であると言われることがしばしばある。そのような中、本研究会のような場で、同じ立場の校長同士で共通課題を話し合う機会を持てるというのは、この上なく貴重な機会であったと考える。今後も大切にしていきたい。

（部長 丸茂明彦）